

保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果Ⅲ

— シルクスクリーン版画制作を導入した造形指導の実践的研究 —

佐 善 圭

岡崎女子短期大学研究紀要45号 抜粋

平成24年 3 月25日

保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果Ⅲ

— シルクスクリーン版画制作を導入した造形指導の実践的研究 —

佐 善 圭*

要 旨

本稿は、保育者養成校における「基礎造形」の授業に、造形活動の実践者としての視点で考案した『Tシャツに印刷する「シルクスクリン版画」』の演習を導入し、大学に入学した当初「基礎造形」授業に苦手意識や不得意意識を感じていた65.1%の学生が、本実践授業後にどのように変化したのかを質問紙調査により明らかにするものである。また、子どもの造形活動を支援し、指導する立場となった時に、子どもの表現を理解し、共感し、心情を共有出来る素地づくりとしての作品展についても考察する。

Abstract

In a childcare worker training institution, "silk-screen engraving on T-shirts" was introduced in the basic modeling class. This paper clarifies how 65.1% students who felt poor at basic modeling at first changed after completing the class. This paper also considers work exhibitions for helping children do modeling and prepare the way for understanding, sympathizing and sharing sentiment with children's expression when they are positioned to help and guide children in the future.

I はじめに

本稿は、文部科学省の「各大学等の特色を活かせるきめ細かな支援（教育・学習方法等改善支援プログラム）」として採択された『感性豊かな保育者を育成する造形教育拡充プログラムの実践的研究（研究代表者佐善圭）』の一研究として、平成20年度から4年間にわたり、岡崎女子短期大学幼児教育学科（以下、本学）の「基礎造形（旧称造形）」授業に「シルクスクリン版画」の演習課題を導入した実践的研究の検証と考察を記すものである。

筆者は平成20年度から4年間、保育者養成校における造形教育に芸術活動を実践する者としての新たな視点の授業試案を考案し、多様な実践を行ってきた。それらの研究成果を公表するものとして、本学紀要に拙稿『保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果Ⅰ— 切り紙、染め紙を活用した造形指導の実践的研究 —』¹⁾、『保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果Ⅱ— シルバーリング制作を導入した造形指導の実践的研究 —』²⁾を執筆した。

その中でも触れているように、本学美術研究室で

は、授業の効果を測定するために、入学後、初めての授業時間に美術に関する質問紙調査³⁾を実施している。調査の結果として特筆すべき点は、調査項目にある「美術に苦手意識を感じる」と回答した学生が、4年間の平均値で65.1%も存在し、「今までの学校での美術・図画工作において、創造の喜びや作品制作の充実感を感じることがなかった」と回答した学生も50.4%存在している。と言う点である。これらのことから、本学に入学してくる学生層の中には、以前から当該科目に対して苦手意識を感じていた者や不得意意識を抱いている者も多く、学習指導要領に位置づけられている「つくり出す喜び」や制作によって得られる達成感さえ、十分に味わって来なかった者も約半数程度含まれていることが分かっている。⁴⁾

保育者養成校における幼児造形の科目は、入学者が入学以前の学校教育の中で指導されてきた図画工作・美術とは一線を画すものであり、自らの造形活動を「得意だと自覚している保育者ほど、自らの描き方、つくり方に呼び込んでしまいがち」⁵⁾（松岡2009）であることも周知の事実であろうが、本学での調査紙の結果を踏まえると、保育者養成校におけ

* 岡崎女子短期大学幼児教育学科

る美術系教員は、卒業後に幼稚園教諭や保育士として幼児期の子どもの造形活動を支援し、指導する立場となる学生の造形的意識を少しでも良質なものに改善し、苦手を克服させる役割を担っていると考えられる。そのために、最も重要なことは、『創作することの楽しさ』、『表現することの素晴らしさ』などを体感し、子どもの喜びに共感できる豊かな感性を身につけること⁶⁾である。

学生の知的好奇心や造形的関心を喚起させ、さらに教員が「教えた」ことから、学生が「したい」ことへと導入する造形カリキュラムは、造形教育の専門家であり、さらに造形を熟知した芸術活動の実践者としての視点で開発されることが望ましい。

今回のシルクスクリーン版画は、幼児造形でのステンシル（型染め）技法を応用したものの一つであるが、最終的な印刷素材を紙からTシャツに変化させることで、図画工作、美術の一般的な課題からファッションへの興味をも内包する造形演習課題として昇華させ、版画技法のひとつである孔版版画の技法習得へと関連づけている。

これから、授業実践の内容を記すと共に、授業後の質問紙による調査結果を検証していく。

II 教育環境

本学での「基礎造形」授業は、1年次前期の専門科目として、幼稚園教諭免許状・保育士資格・卒業の各必修単位になっている。

本学の幼児教育学科には、通常の短期大学課程2年制の第一部と、昼間二交替制3年制の第三部が設置されている。在学者数は次の通りである。（表1）

表1 本学在学者数（各年度5月1日の在学学生数）

	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
第一部	232名	229名	238名	243名
第三部	88名	61名	89名	91名

そして各年度共に第一部6クラス、第三部2クラスの合計8クラス編成となっている。

また、平成22年度までは、美術専任教員が筆者のみのため、非常勤講師2名と指導にあっていたが、平成23年度より専任教員2名で指導にあっている。

III 版画の制作について

1. 版画の種類と技法

版画の技法は、素材や版種によって様々な技法が開発されてきた。その中で代表的な版画技法を挙げ

ると、下記の4種類の形式に分類される。

(1) 凸版 (letterpress)

凸版は、版に凸部を作ることで製版し、凸部にインクや絵具をつけ、紙などに刷り上げるものである。代表的な版には、「木版画」や「紙版画」などがある。また、様々な「スタンプ（型押し版）」や自然素材や加工素材などを張り込み転写する「コラグラフ」、リノリウム素材やゴム素材を使う「リノカット」、絵画技法の「フロッタージュ（写し絵版）」、「活版印刷」なども凸版の形式にあげられる。

特に木版は、木材の横断面を使用する「木口版画」と縦断面を使用する「板目版画」に分けられ、江戸期に盛んとなった浮世絵は、その代表とされるものである。

(2) 凹版 (intaglio)

凹版は、版に凹版部を作ることで製版し、凹部にインクを詰めた後、それ以外の部分からインクを除去し、版画専用のプレス機などで圧力をかけて印刷する技法である。主なものは、銅板や亜鉛板などの金属板を使い、直接版に彫刻を施す「エングレービング」や「ドライポイント」、金属の腐食を利用した「エッチング」、また、間接法の「アクアチント」、「メゾチント」などの技法があり、ドライポイントには塩化ビニール板やアクリル板などで代用したものもある。

(3) 平版 (lithograph)

平版は、「オフセット印刷」の起源とも言える版画手法である。

版面自体を彫刻することはなく、凹凸の無い平面の版に油性の描画材（解墨、リトクレヨンなど）で描く。描画後、その上にアラビアゴム液などを付着させることで、描画した部分と手を加えない部分に親水性と新油性の反発作用現象を起こし、版に付着するインクにより、画面を再現する印刷技法である。「リトグラフ、石版画」と呼ばれ、旧来は石灰岩板を版としていたが、現在では、アルミ板、亜鉛板などが主流となっている。

(4) 孔版 (stencil)

孔版は、穴の空いた布や紙の版に耐水性の素材を貼り付け、インクや染料、顔料などを印刷する技法である。「シルクスクリーンプリント」の由来は、絹布を版として用いていたため、現在でも通称「シ

ルク」と呼ばれている。

版画の特徴は、他の版画では、図柄が左右逆向きに印刷されるが、孔版では、そのままの形が印刷されることである。日本で発明された謄写版も孔版の一種である。

また、シルクスクリーンプリントの起源とも言える「ステンシル（切り抜き版）」は、版画の中でも最も古い手法の一つであり、原始時代の洞窟壁画にもその痕跡が見られる。そして、染色の捺染技法もこれらのプリント技法と同様の手法で発展してきた。

孔版の利点は、印刷物の大きさに制限がないため、大きい版を効率的、経済的に多色印刷できるところにあり、印刷の技術操作も他の版画技法と比較して簡単に習得することが出来ることである。また、初期設備や資材も少なく、どのような素材にも印刷が可能な点もあげられる。

2. シルクスクリーン版画の製版法

シルクスクリーンの製版は、感光法、ブロック法、カッティング法に分類される。

(1) 感光法

感光法は、写真製版法を応用したものである。紫外線を照射すると硬化し被膜をつくる感光乳化剤を使用する。太陽光でも製版は可能であるが、天候により感光時間などの条件を調整することが困難なため、通常は紫外線を照射する大型機器を使用する。版面の被膜が強いため、大量印刷に適している。

(2) ブロック法

ブロック法は、直接スクリーン版に油性描画材で絵柄を描画する。乾燥後に水性の目止め材を全面に塗布し、その後、描画材を洗い流すことで製版する方法である。筆のタッチや描画材の強弱を表現できるのが特徴である。

(3) カッティング法

カッティング法は、ニスやラッカーなどの被膜材が塗布してある原紙や柿の渋を使った渋紙などをカッターなどで切り抜き、インクや染料、顔料などを印刷する技法である。美術版画では、シャープな表現を可能にする透明カッティングフィルム原紙（以下、フィルム）を使用する。設備、加工、用具の準備のいずれの点から見ても、カッティング法がシルクスクリーン製版の中で最も簡単な技法である。

IV 授業実践の方法

本章では、筆者が立案した『シルクスクリーン版画』の授業について、その制作の方法や実践についての詳細を述べる。

1. 準備

本授業は、「基礎造形」授業（15回）の6回～9回目に位置している。2～5回の授業で立体制作を行なった後の授業であり、演習内容を立体から平面の制作に転換している。

授業1回目は、Tシャツのアイデアをデザインし、構想スケッチを描く。デザインが決定したら、下絵を清書する。2、3回目は、フィルムに下絵を転写し、カッターで切り抜く。その後、フィルムをスプレー糊でスクリーン枠に貼り付ける。4回目は、Tシャツ素材に印刷する。

学生には、1回目に授業内容の印刷物を配布し、制作や作業の内容を説明する（図1）。特に過去の学生参考作品に基づいた制作例を数多く紹介する。アイデア構想スケッチ、下絵と完成作品を合わせて紹介することで、作者が何をイメージし、どのような手順で制作したのかを支援プログラムにより美術室に完備されたプロジェクターを利用し、映像で紹介する。制作上の難点や過去の学生が失敗した場面など、数多くの作例を示すことで、初めての学生が陥りやすいポイントを事前に指導し、これから制作する学生が作品完成までの工程を想像し、円滑な作業へと繋がっていくように方向付けをする。



図1 授業内容の印刷物

2. 制作上の説明及び注意事項

制作にあたり、下記の項目を説明する。

- 1) 版は印刷の最大有効面が18cm×13cmのA4版サイズを使用する。
- 2) 今回のシルクスクリーン版画の制作は、3枚の版（フィルム）を使用して制作する。
- 3) 1版につき1色の印刷とする。インクの混色は出来ない。
（そのため、1版ごとに異なるインクで印刷する方法と全ての版を同じ色で印刷する方法などを説明し、作りたいイメージを尊重させながら、デザインを決定する様に指導している）
- 4) 印刷する位置は、Tシャツの前面、背面のいずれでも良い。
- 5) 基本的制作方法は、
 - ① 1つの絵柄を3色で分割構成したデザイン。3色（3版）を重ねることで絵柄が完成するデザインをTシャツの1ヶ所に印刷する。
 - ② 1つの絵柄を2色で構成したデザイン。2色（2版）を重ねることで絵柄が完成するデザイン（18cm×13cm以内）をTシャツの1ヶ所に印刷し、残りの1版で、1色の絵柄などを印刷する。
 - ③ 3つの絵柄のデザイン（18cm×13cm以内）をTシャツの3ヶ所に印刷する。各絵柄は単色であるが、色の組み合わせは自由。
 - ④ 大きな絵柄を3分割し、3版を並列させ完成するデザインなども可能。注意点は、版と版を並列して絵柄を重ね合わせるため、印刷の位置合わせが難しく、場合によっては、作品に色ムラの線ができることがある。

- 6) 1枚の版を複数ヶ所に使用する場合、印刷毎の版洗浄が必要なため予想以上の時間がかかる。なお、1枚の版を使いまわして、ストライプ柄などを印刷することは、インクの乾燥上不可能である。

3. 印刷素材について

授業に関するシルクスクリーン版画の用具などは、全て大学で準備するが、印刷用素材であるTシ

ャツは、色、サイズなどの個人的要望が多いため、学生各自が用意する。基本的には、印刷のインク発色を確保するために、綿100%の白色Tシャツを持参するように指示している。

しかしながら、白いTシャツを普段着として着用しない学生や、すでに他の色のTシャツを持っている場合などは、それらを持参、利用しても構わない。但し、印刷用インクは、白地の布地に適したアクリル系水性インクのため、濃色（紺、黒色など）のTシャツに白色や淡色系（黄色、黄緑色ほか）のインクを印刷する場合や発色の良い橙色、赤色のインクなどを印刷する場合に、布地がインクを吸い込み、鮮明にプリントできない場合があることを事前に説明している。

また、完成後の着用や使用を奨励する点から、学生が普段使用しているエプロン、トレーナー、デニムなどの普段着や親戚知人へのプレゼントにする子供服やバックなどについても適応する綿素材であれば許可している。

しかし、初めての制作でもあり、印刷ミスする可能性も考慮して、高価なものを持参しないように指導している。

素材は綿100%が適しているが、少量であればポリエステルやアクリルなどが混紡されていても印刷に大きな支障はない。例外として綿100%でも、タオル地はインクのりが悪いため、印刷用素材として不適としている。

4. シルクスクリーン版画の用具

下記の用具を使用する（図2）。

右下からカッター、デザインカッター、スクリーン枠、パレットナイフ、シリコンヘラ、スキージ、水性インク、スプレー糊。

その他、フィルム原紙、新聞紙、ウエス、ゴム手袋、ペイントうすめ液などを使用する。



図2 用具一覧

5. スケッチ・下絵制作

(1) 構想スケッチ (デザインスケッチ)

まず、制作の基調となるテーマを決定し、作品のコンセプトやデザインのアピールポイントなどを考える。次に教員が作成したワークシート (A4用紙) に複数のTシャツデザインを構想スケッチとして描く。切り抜きに適した絵柄やイラストデザインは色鉛筆などで着彩し、色彩計画を立てる。

印刷手順についても、薄い色から順に濃い色を印刷する方法や大きな色面から小さな色面の順番に印刷する方法などを説明する。出来るだけ多くの絵柄やイラストデザインを描くことで、イメージを膨らませる (図3)。



図3 学生によるスケッチ

(2) 下絵

デザインが決定したら、18cm×13cmの下絵枠に下絵を描く (図4)。



図4 下絵

6. フィルム制作

下絵が完成したら、フィルムを上置き、透けて見えるデザインを鉛筆でトレースする。多色刷りの場合は、色別にトレースする。この時、トレースするデザインは、必ずフィルムの中央に描くことを指導する。

カッターを使い、トレースした跡を丁寧に切り抜く (図5)。



図5 フィルムを切る

毎年、カッターの刃を折った事がない学生や折ることさえ知らない学生も混在しているので、本授業ではカッターの使用方法についても指導する。フィルムは、薄く裂けやすい素材なので、フィルムの切残しを引きちぎらないように指導する。

7. 製版

授業開始前に、教室内にスプレーを行うためのスプレー専用ブースを教員が設営する。

製版手順は、スプレーブースのシートの上に、糊付着防止用紙を置き、その上にカットしたフィルムをセットする。

シルクスクリーン版画の特徴として、印刷によりデザインは反転しないので、下絵と同じ向きにフィルムを置く。その際、前の使用者が使い終わった糊付着防止用紙の上に誤ってフィルムを置いてしまうとフィルムの裏面にも糊が付着し、その後の印刷作業に支障を来すので、十分に注意する。

スプレー糊 (住友3M 55) は、使用前に必ず缶全体を振ってから使用する。スプレーを噴射する際は、フィルムから20cm以上離し、全体に糊が付着するように噴射する。その際、缶を逆さまにして噴射すると途中で糊が出なくなるため、必ずスプレー缶より噴射ノズルが上向きになるように持ち噴射する。スプレーブースに持ち込むものはフィルムのみで、決して、スクリーン枠を持ち込まないように注意する。

次に適量のスプレー糊が塗布されたフィルムを持って机に移動し、フィルムを机の上に置く。フィルムと枠がずれないようにフィルムの上にスクリーン枠を静かに置き、スクリーン枠の中央を手のひらで押さえ、フィルムと枠を圧着して貼り付ける。パーツがある場合は同様に新しい付着防止用紙を敷き、その上に切り抜いたパーツを並べ、スプレーの糊を噴射する。適量の糊が塗布されたパーツを1枚ずつ机の上に置き、狙いを定めてスクリーン枠を上から押さえる。

以上で製版完成である。

8. 刷り (印刷)

刷りの準備として、Tシャツの身頃の下敷き用厚紙を入れる。多色刷りのデザインは、厚紙にスプレー糊を塗布し、Tシャツがずれないようにする。

刷りはスクリーン枠を押さえる者とスキージを扱い刷る者の二人ひと組になる。スキージ、ヘラ、インクを用意し、手元に道具を置くための新聞紙を敷く。

スクリーン枠をTシャツの刷りたい場所にセットする。この時にTシャツの縫い目近くは、スキージの圧がかけられないため印刷を避ける。

インクの粘度を調整する。シルクスクリーンのインクは、ある程度の粘りと共に、インクを版の下に落とすための薄さも必要となる。

インクは、大匙1～2杯程度をスクリーン枠の上部(インクを切り抜いたデザインの幅より少し広め)に置く。スキージは両手の指先に力を入れしっかりと持ち、印刷中は45°の角度を保持したまま、一定のリズムで引くようにする(図6)。



図6 二人ひと組で刷る

Tシャツを押さえてもらい、スクリーン枠を持ち上げ、刷りを確認する(図7)。



図7 刷りの確認

スキージやスクリーン枠に付いたインクをヘラで容器に戻す。2版目以降も同様の手順で行う。2版目は、インクが完全に乾燥してから行う。

完成後にTシャツにあて布をして、100℃程度の

アイロンを45秒間押し当てるとインクが定着する。

9. 版清掃

刷り終了後、スクリーン枠からインクを取り除き、水で洗浄する。スキージ、ヘラも同様に水で洗浄し、雑巾で水分を取り除く。次にウエス2枚にペイント薄め液を染み込ませ、スクリーン枠を両側からウエスで挟み、強く擦って、残存物の糊、インクを除去する。印刷障害の原因となるので、版清掃後、糊残りがいないか、教員が確認する。

V 作品展と鑑賞

1. 学生作品

完成後、お互いの作品を鑑賞し合う。学生によるデザインの一



図8 学生作品



図9 学生作品





図11 学生作品



図12 学生作品



図13 学生作品



図14 学生作品



図15 学生作品

2. 作品展に向けて

造形において、作品が完成した時点で完了する。しかし、表現された作品は、作者の手を離れた瞬間に生命を授かり、一人歩きをはじめるのである。この世の中で、芸術や美術作品といわれている以外にも、私たちの周りには、数多くの「いろ」や「かたち」があふれている。普段気に留めることはないが、美しい「いろ」や「かたち」は、人のところに安らぎを与え、時に刺激し、時に癒やしを与える存在となる。「美」と言う概念は、時代と共に変化し、その価値観は時と共に進化しているのである。

作品は、自らの価値観を基準として、さまざまな視点から鑑賞される。鑑賞者に共感できる新たな「美」として認識された作品は、鑑賞者の心の中に強い記憶を留める。鑑賞を通して、「美」見極める経験を蓄積していくことが、何よりも求められているのではないだろうか。そして制作者は、作品の創造過程を振り返り、自らの「美」について再認識するのである。

このような造形制作の醍醐味を制作者として実感するために、毎年、学生全員での作品展を開催してきた（図16、17）。作品展は、開催する季節に合わせて「真夏のTシャツ展」と命名し、空き教室を会場として使用した。作品をより鑑賞し易くするために、各自、ダンボール素材ののハンガーを制作し、会場では、天井から下げる作品と木製の展示棒に固定する作品とした。ガラス張りの廊下からも展覧会全体が一望でき、また、展示作品のあいだを歩きながら鑑賞できるように工夫した（図18～20）。

展示完了後、制作者全員で鑑賞会を行い、最後に作品展の感想を記入した。感想からは「それぞれの作品が良かったけれど、展覧会で全部まとまり、より素敵に感じた」や「作品展を通してこの授業のねらいが分かった」などの記述が見られた。塚田は展覧会を「人と作品が出会うとき、それは数々の物語

が「空中に放電され」る瞬間である。」(原文まま)⁷⁾と表現しているが、筆者は4年間で600点を超える作品を展示し、様々な学生の物語が込められた作品展が学内で認知され、定着してきたように感じている。



図16 平成23年作品展全体風景



図17 平成22年作品展風景部分



図20 学生作品

VI 受講者の意識調査と考察

(1) アンケートの内容

これまで、シルクスクリーンの制作実践について述べてきたが、本稿の授業を受講した学生は、どのような体験として受け取り、どのような感想を抱いたのであろうか。制作終了時に質問紙調査を実施し、授業の効果を探った。

本アンケート調査における被験者数は、幼児教育学科造形(佐善担当)受講者、平成20年度151名、平成21年度137名、平成22年度158名、平成23年度120名(欠席者を除く)である。調査時期は、各年度ともに授業が完了した7月上旬に実施し、授業内にアンケート用紙を配布し、記入後に回収した。

質問内容は、次の通りである。

- Q1. 授業に意欲的かつ積極的に参加しましたか
- Q2. シルクスクリーン版画の制作の感想はどうでしたか
- Q3. 今回の授業以前にシルクスクリーン版画を行なったことがありますか
- Q4. 教師のアドバイスは、役に立ちましたか
- Q5. 準備された材料や道具は、制作の役に立ちましたか
- Q6. 作品展は、必要だと思いますか
- Q7. 授業の満足度はどの程度ですか 5段階で評価してください
- Q8. 今回の制作は、今後保育者として役立つと思いますか
- Q9. 今回の授業で一番印象に残っていることをひとつ書いてください(自由記述)

Ⅶ 分析と結果

Q 1. 「授業に意欲的かつ積極的に参加しましたか」の質問に「意欲的かつ積極的に参加した」と回答した学生は、20年度79.5% (120名)、21年度73.7% (101名)、22年度76.6% (122名)、23年度81.7% (98名)であった。「普通」と回答した学生は20年度20.5% (31名)、21年度26.3% (36名)、22年度23.4% (36名)、23年度18.3% (22名)で「積極的に参加しなかった」と、回答した学生は4年間を通じて一人も存在せず、授業に対し、意欲的かつ積極的に参加していたことが分かった (図21)。

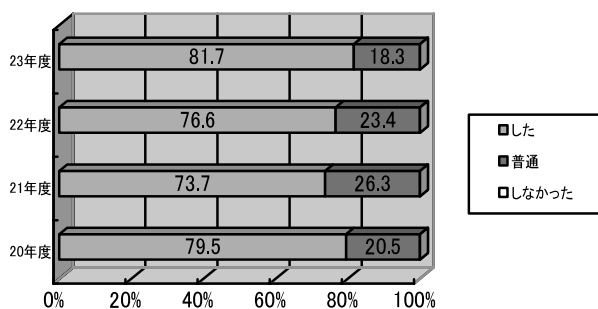


図21 授業に意欲的かつ積極的に参加しましたか

Q 2 「シルクスクリーン版画の制作の感想はどうでしたか」の質問では、20年度「とても楽しかった」61.6% (93名)、「楽しかった」36.4% (55名)、「どちらでもない」2% (3名)、21年度「とても楽しかった」64.2% (88名)、「楽しかった」33.6% (46名)、「どちらでもない」2.2% (3名)、22年度「とても楽しかった」61.4% (97名)、「楽しかった」36.1% (57名)、「どちらでもない」2.5% (4名)、23年度「とても楽しかった」58.3% (70名)、「楽しかった」40.0% (48名)、「どちらでもない」1.7% (2名)であった。「つまらなかった」「とてもつまらなかった」と回答した学生は、4年間を通して1名もいなかった。総じて版画の演習を楽しんでいた様子が分かった (図22)。

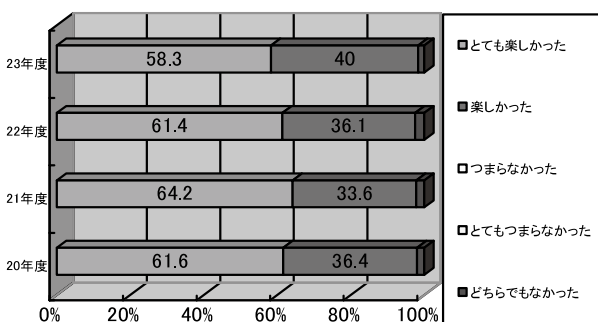


図22 今回のシルクスクリーン版画の制作の感想はどうでしたか

Q 3. 「今回の授業以前にシルクスクリーン版画を行なったことがありますか」の質問では、「ある」が、20年度9.9% (15名)、21年度14.4% (20名)、22年度19.6% (31名)、23年度18.3% (22名)であった。

4年間の平均値で15.5%が、大学入学前にシルクスクリーン版画の経験者であるが、木版画や紙版画などの凸版版画などに比べて、経験者が少ないのは、指導者に専門的知識が少ないものと推察される。20年度9.9%であった数値が、22年度19.6%、23年度18.3%に上昇していることについては今後の調査対象としたい (図23)。

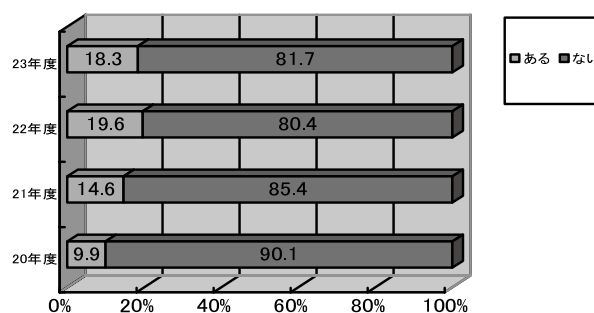


図23 今回の授業以前にシルクスクリーン版画を行なったことがありますか

Q 4. 「教師のアドバイスは、役に立ちましたか」については、「とても役に立った」が、20年度82.1% (124名)、21年度76.6% (105名)、22年度70.3% (111名)、23年度82.5% (99名)で、「役に立った」が、20年度17.9% (27名)、21年度23.4% (32名)、22年度29.7% (47名)、23年度17.5% (21名)であった。

「役に立たなかった」、「まったく役に立たなかった」「どちらでもない」と回答したものは、1名もおらず、教師のアドバイスを制作に役立てていたことが確認できた (図24)。

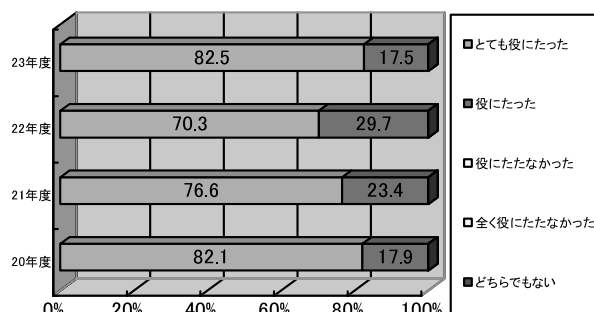


図24 教師のアドバイスは、役に立ちましたか

Q 5. 「準備された材料や道具は、制作の役に立ちましたか」については、「とても役に立った」が、

20年度74.2% (112名)、21年度78.1% (107名)、22年度70.3% (111名)、23年度77.5% (93名) で、「役に立った」が、20年度25.2% (38名)、21年度21.9% (30名)、22年度28.5% (45名)、23年度21.7% (26名)、「どちらでもない」が、20年度0.6% (1名)、21年度0% (0名)、22年度1.2% (2名)、23年度0.8% (1名)であった。「役に立たなかった」、「まったく役に立たなかった」と回答した者は、いなかった。適切な材料、道具の準備がなされていたと考えられる(図25)。

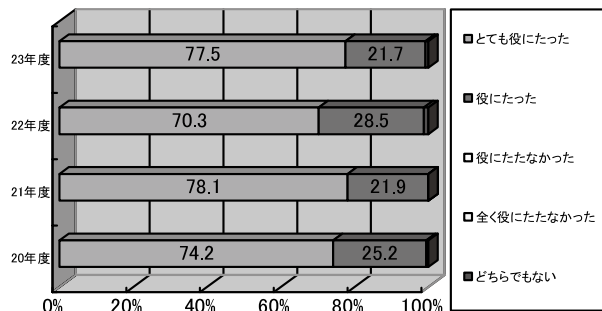


図25 準備された材料や道具は、制作の役に立ちましたか

Q 6.「作品展は、必要だと思いますか」では、「とても必要」が、20年度29.8% (45名)、21年度28.5% (39名)、22年度34.8% (55名)、23年度23.3% (28名)で、「必要」が、20年度63.6% (96名)、21年度64.2% (88名)、22年度59.5% (94名)、23年度73.3% (88名)、「あまり必要ではない」が、20年度1.3% (2名)、21年度1.5% (2名)、22年度1.9% (3名) 23年度1.7% (2名)であった。

「どちらでもない」と回答したものは、20年度5.3% (8名)、21年度5.8% (8名)、22年度3.8% (6名)、23年度1.7% (2名)、「まったく必要でない」と回答した者は、いなかった。「とても必要」「必要」と回答した者が毎年90%を越え、作品展の必要性を感じている様子が窺われる。今後、筆者は新たな展示方法についても考案していく必要性を感じている(図26)。

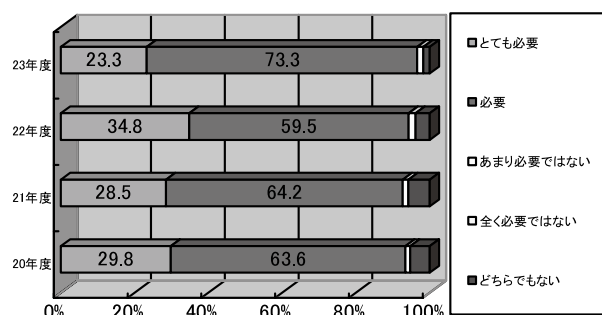


図26 作品展は、必要だと思いますか

Q 7.「授業の満足度はどの程度ですか 5段階で評価してください」では、「5」と評価したものが、20年度61.6% (93名)、21年度62.0% (85名)、22年度61.4% (97名)、23年度60.0% (72名)、「4」と評価したものが、20年度29.8% (45名)、21年度29.2% (40名)、22年度31.6% (50名)、23年度32.5% (39名)、「3」と評価したものが、20年度8.6% (13名)、21年度8.8% (12名)、22年度6.3% (10名)、23年度6.7% (8名)と評価したものが、20年度0% (0名)、21年度0% (0名)、22年度0.7% (1名)、23年度0.8% (1名)であった。「1」と評価した回答はなく、「2」は、4年間で2名のみであった。これらの数値から学生の満足度は、高いと推察出来る(図27)。

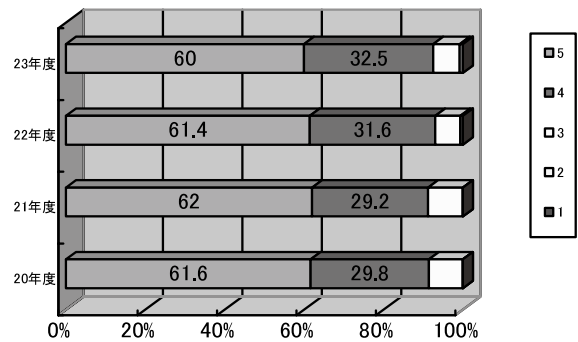


図27 授業の満足度はどの程度ですか

Q 8.「今回の制作は、今後保育者として役立つと思いますか」については、「とても役立つ」が、20年度43.7% (66名)、21年度59.1% (81名)、22年度48.1% (76名)、23年度57.5% (69名)で、「役立つ」が、20年度54.3% (82名)、21年度40.2% (55名)、22年度50.0% (79名)、23年度42.5% (51名)、「役に立たない」が、20年度0.7% (1名)、21年度0% (0名)、22年度1.3% (2名)、23年度0% (0名)、「どちらでもない」が、20年度1.3% (2名)、21年度0.7% (1名)、22年度0.6% (1名)、23年度0% (0名)であった。「全く役に立たない」と回答した者は、1名もいなかった。ほとんどの学生が、「役立つ」、「とても役立つ」と回答していることから、今回の

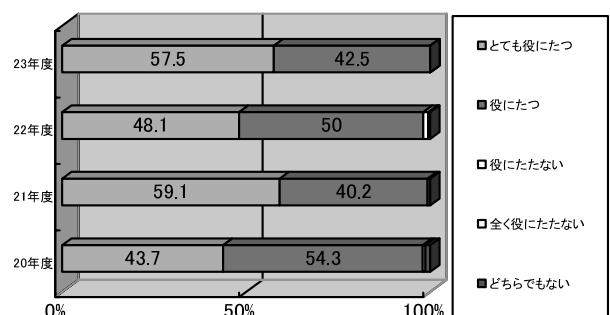


図28 今回の制作は、今後保育者として役立つと思いますか

孔版版画であるシルクスクリーン版画は、これから保育者となる学生の造形演習課題として適当であると考えられる(図28)。

Q9. 今回の授業で一番印象に残っていることをひとつ書いてください(自由記述一部抜粋)

(以下、原文のまま掲載)

- ・難しいこともあったけど、制作がうまく進んで良かった。
- ・デザインを考えるのは大変だったけど、下絵通りに出来てとても満足。
- ・造形が好きになりました。
- ・初めての経験で、とても楽しかった。
- ・みんなでお揃いのシャツができるなんて考えてもみなかった。
- ・細かいデザインでしたが、先生に具体的にほめられて、とても嬉しかったです。
- ・色々なデザインを考えてアイデアの幅が広がった。
- ・完璧にできた。
- ・自分で作ることが出来て、愛着も湧いたし、難しいところもあったけど、好きなデザインが出来て楽しかったです。
- ・絵を描くことだと肩に力が入ってしまうが、版画だと思ったら、うまく力が抜けて楽しく制作できた。
- ・苦手意識が少なくなった。
- ・「すごくカワイイ」と友達にほめられて嬉しかった。
- ・授業全体を通して作ることの大切さを学んだ。
- ・高校までとは、また違った体験ができ、一層美術が好きになりました。
- ・以前、不器用な私には、美術は辛い時間でしたが、先生がおっしゃった「楽しんで作ろう」から、造形が好きになりました。
- ・デザインが、私らしくて良いとほめられたのが、印象に残っています。
- ・刷ったあと、作品を見るまでドキドキしました。
- ・「他人と比較せず、評価を気にするな」と言われてから、楽しむことが出来ました。
- ・「絵が下手な人のほうが、子どもの心がわかる素敵な保育者になるよ」と言われて、頑張ろうと思いました。
- ・最初の構想と違ったのですが、オリジナリティがあって良いと言われて嬉しかったです。
- ・売っている様なTシャツが案外簡単に出来るもの

だと思った。

- ・普段使うものが作れて良かった。
- ・自分一人ではできなかったけど、先生のアドバイスは、いつも役に立った。
- ・失敗してデザインが変わっちゃったけど、先生が「いいデザインだとほめてくれたのがうれしかった。」
- ・それぞれ作品が良かったけれど、展覧会で全部まとまって、とても素敵だった。

感想の中には、初めての制作のため、戸惑いの痕跡も見られるが、作品の制作から展示、鑑賞をとおしての充実感や達成感を多くの学生が味わっている記述も数多く見られた。教員の関わりや声かけによって制作の楽しさを実感している記述もみられ、筆者自身が毎時間の授業を第一に考え、更なる授業への取り組みを一層充実させていかなければならないと、心を新たにした。

VIII まとめ

本稿は、保育者養成校における「基礎造形」の授業に、Tシャツに印刷する「シルクスクリーン版画」の演習を導入し、その実践的研究の検証と考察について述べてきた。保育者養成校における「造形」の科目は、学校教育の図画工作・美術とは、異なる科目でありながら、学生の中には、同じ延長線上に位置する科目であると錯覚している者も多く見られる。そのため、筆者は入学後授業に対する先入観を払拭し、科目に対する苦手意識や不得意意識から早期に解放させなければならないと常に感じてきた。そして、学生の知的好奇心や造形的関心を喚起させ、さらに教員が「教えたい」ことから、学生が「したい」ことへと導入する造形カリキュラムの必要性を感じ、造形の本質を探究する芸術活動の実践者であり、教育を専門とする者として、保育者養成校の演習内容を考案してきた。新しい視点で美術を捉えながら、与えられた短い時間の中でいかに効率よく、そして、深く造形指導できるかという事が、筆者に与えられた使命であろうと考えている。

4年間の質問紙調査から読み取れることは、多くの学生が積極的に授業に望み、さらに演習課題を楽しみながら制作に望んでいたことを数値として客観的に確認できたことである。保育者は、造形のスペシャリストである必要はない。ただ、子どもの造形活動を支援し、指導する立場となった時に、子どもの表現を理解し、共感し、心情を共有できる素地づ

くりこそ必要であり、この時期に造形の本質を体感させ、「美」的価値観に触れることが最も重要であろう。そのため、本学では作品制作と対になる鑑賞教育の導入も4年前から行なってきた。学内での展覧会は、一部の作品優秀者だけでなく、全制作者による作品展であり、お互いの作品を評しながらの鑑賞会は、今後の創作活動や保育活動に確かな手応えを感じると同時に、制作者自らが、内なる「美」の創造過程を振り返り、「美」についての再認識を行なうものと考えている。また同時に、保育者として子どもの作品に対し、的確な言葉掛けをする訓練になったと思っている。しかしながら、鑑賞教育に関しても方法、回数など、更なる改善の余地があると考え、今後の研究において成果を上げていきたいと考えている。

謝辞

本研究は、文部科学省より採択された平成20年度「各大学等の特色を活かせるきめ細かな支援（教育・学習方法等改善支援プログラム）、課題名：『感性豊かな保育者を育成する造形教育拡充プログラムの実践的研究（研究代表者：佐善圭）』」の助成ならびに、本学平成23年度課題研究助成により採択された「保育者養成校における美術鑑賞のあり方に関する研究（研究代表者：佐善圭）」によるものです。関係各位に心から感謝の意を表します。

註

- 1) 拙稿「保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果 — 切り紙、染め紙を活用した造形指導の実践的研究 —」、岡崎女子短期大学研究紀要第43号、2009年、pp.31～40
- 2) 拙稿「保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果Ⅱ — シルバーリング制作を導入した造形指導の実践的研究 —」、岡崎女子短期大学研究紀要第44号、2010年、pp.23～33

- 3) 調査協力：岡崎女子短期大学幼児教育学科「造形、基礎造形（佐善担当）」受講者、平成20年度194名、平成21年度137名、平成22年度158名、平成23年度120名、合計609名
- 4) 前掲、「保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果Ⅱ — シルバーリング制作を導入した造形指導の実践的研究 —」、p.23
- 5) 大橋功監修「美術教育概論」、日本文教出版、2009年、p.54「幼児造形の理解」松岡宏明
- 6) 拙稿「岡崎女子短期大学平成22年度授業内容」、岡崎女子短期大学、2010年、p.53
- 7) 佐藤学・今井康雄編「子どもたちの想像力を育む アート教育の思想と実践」、東京大学出版、p.302、「鑑賞教育の可能性をさぐる」塚田美紀

参考文献

- ・植田理邦「シルクスクリーン」、美術出版社、1970年
- ・田中素樹編「シルクスクリーンハンドブック」、視覚デザイン研究所、1980年
- ・小本章「シルクスクリーンの発想と展開」、美術出版社、1980年
- ・小本章「シルクスクリーン」用具と技法、美術出版社、1995年
- ・多摩美術大学校友会編「新しいシルクスクリーン入門」、誠文堂新光社、2001年
- ・福田隆眞、福本謹一、茂木一司「美術科教育の基礎知識」、建帛社、1985年
- ・宮脇理監修「ベーシック造形技法」、建帛社、2006年
- ・栗田真司編「あたらしいぞう1・2」、東京書籍、2010年
- ・栗田真司編「あたらしいぞう3・4」、東京書籍、2010年

図版出典

図1～20 筆者撮影